

みいつけた!

福岡県保育協会通信



By mutual confidence and mutual aid,
Great deeds are done, and great discoveries made;
相互信頼と相互扶助にて、偉大なる行為はなされ、偉大なる発見がなさる。
—ギリシアの詩人 ホメロス

子ども子育て支援新制度を考える	2-3
福岡地方保育事業研修大会	4
筑後地方保育事業研究大会	5
新園紹介	6-7
全国保育士会研究大会	8-9
公立発信	10
コラム 生の松原子どもスコーレ 山下麻里	11
福岡県保育士就職支援センター・編集後記	12

子ども・子育て支援新制度を考える

保育所から幼保連携型認定こども園へ

1. はじめに

国から平成29年度における公定価格の仮単価や公定価格に対するFAQ（よくある質問）等が示されるにつれ、子ども・子育て支援新制度の概要が少しずつ理解され、保育所から幼保連携型認定こども園（以下「認定こども園」）へ移行することのメリット、デメリットもぼんやりだが見えてきたように思う。子どもたちに対して平等に保育、教育が実践されるべきと考えている先生方の中には今回の制度改革そのものに反対の方もおられると思うが制度改革は目の前に迫っているため、限られた情報の中で私なりに考えているところを述べてみたい。

なお、認定こども園に移行すると直接契約となり事務が複雑になる（その割に事務職員の加配は少ない）ことや子育て支援事業には触れず、公定価格の仮単価の側面を中心に述べることにしたい。

2. 1号認定定員を設定しない場合

同じ条件で公定価格の試算を行ったところ、やや認定こども園の方が多という結果になった。自園（150名定員、その他地域、処遇改善等加算10%）を想定した試算で恐縮だが、2号認定90人、3号認定80人で試算した結果は総額150,000,000円強であり、150名定員で20名の弾力運用ありとした保育所との差は1,500,000円程度であった。

これだけを見ると、保育所の単価も上がっており、子どもたちの入所状況が今と変わらなければそのまま保育所で続けるという選択が出てくるのも当然に思われる。

ただ、幼稚園や認定こども園は学校教育と位置づけられる。教育については、保育所も幼稚園や認定こども園以上の教育を行っていることを利用者に示していくほかないが、今後、3歳以上児の無償化（無償化については教育標準時間だけの無償化なのか2号認定の子どもたちも完全に無償化するのか等いくつかの可能性が考えられる）や5歳児の義務教育が始まった場合、2号認定の子

どもについて今までどおり保育所に委託されるかは不透明である。保育所で残るところが多ければ、この不安は少し払拭されるが、児童人口の減少もこれらの不安に追い打ちをかけている。

3. 1号認定定員を設定する場合

国の認定こども園の規模は、1号認定120人、2号・3号認定60人として説明することが多いが、保育所から認定こども園に移行する場合、1号認定の子を数十名という単位で受け入れるのは厳しく、非現実的である。1号認定定員を設定して移行を検討した先生方も最小の定員区分15人で試算された方も多いのではないと思う。これであれば、3～5歳児各5人ずつを1号認定の園児にする、又は、3～5歳児各4人ずつの1号認定の園児と満3歳児の1号認定の子どもが年度途中で2～3人入るといったように現実味のある状況が想定できる（定員規模90人程度以下ではこの想定も厳しい）。

あくまで1号認定の園児が15名で4月からいた場合であるが、1号認定を設定しない場合と同じように（1号認定+2号認定90人、3号認定70人、チーム保育加配加算2人）試算すると166,000,000円強となり、1号認定の子どもを受け入れるために1・2歳児を10名少なくしたにも関わらず、1号認定を設定しない場合に比べ14,000,000円以上多くなった（注1）。

1号認定を設定しなければ、副園長・教頭設置加算、学級編成加算、チーム保育加配加算等が全く加算されないためである。

このことについては、全く納得できず、実態から見ても多くの保育所が幼稚園と同じようにクラスがあり、職員協働によるチームとしての保育（教育についても学校教育に位置づけられていないだけで質的には同じ）を行っていること、さらに、認定こども園として学校教育に位置づけられても1号認定がなければ全く加算がないことを考え合わせると、国が保育と教育に関してかなり偏重した考えをもっている表れではないかとも疑いたく

なる。

なお、副園長・教頭配置加算や学級編成加算については、当初1号認定と2号認定の両方で加算し合算する方法が考えられていたようであるし、1号認定を設定した場合の加算方法（チーム保育加配加算の人数の上限等）が2号認定や3号認定を含めた利用定員による等混乱も見られる。

第1回九州保育三団体研究大会の大会宣言でも是正を求めているが、財源に加え国が教育の側面からも保育所を差別化していることを考えると、是正されても1号認定を設定しない認定こども園についてのみになるのではと危惧するところである。

話を戻して、もし1号認定を設定して認定こども園に移行しようと考えた場合の問題点について少し言及したい。

第一に、そもそも1号認定定員が認められるかである。多くの市町村で幼稚園の定員割れが起こっており、市町村調査による今後の児童動向による1号認定の需給は十分満たされている。この点から見ると市町村は新たに1号認定の定数を増やす必要はない。

しかし、幼稚園及び保育所が認定こども園に移行する場合における需給調整にかかる特例措置により、市町村は「都道府県計画で定める数」にもしばられることとなる（国はできるだけ移行させたい）。

福岡県によると、その数は市町村から県に上げられた数を参考に決めていくということなので、実際どれくらいの定員数が認められるのかは未知数で、今後市町村と協議を進めていくしか手がない。福岡県は市町村からの認定こども園の認可定数についてはそのまま認める方針とのことである。

第二の問題は、1号認定の子どもに対する対応である。認定こども園に移行した結果、お昼寝をする子とその前に降園する子や長期休みがある子とない子となると、子ども集団が二つの異質集団になってしまう。又、生活リズムの違いにより運動会の練習をはじめ、保育活動に支障がでてくる

福岡県保育協会広報部会副会長 日野 智

新入ひまわり保育園 園長

と考えている先生方も多いのではないと思う。私もそれは避けたいと考えており、もし1号認定の定員を設定するにしても、1号認定の子どもが2号・3号の子どもと同じリズムになるよう工夫できないかと模索している。

この点について、国や福岡県の見解は例えば長期休みを設けるとか設けないとかは、園の運用の問題であり園の規則等で定めればよいのではとのことである。

4. 最後に

保育所から認定こども園への移行については、今のところ移行を検討しないとする意見と平成27年度は移行しないが平成28年度以降に検討する意見とに分かれているように思う。私は、後者の姿勢で考えているので、その過程で頭を巡らしていることの一部をここに述べてみた。

ただ、考えれば考えるほど数々の疑問や移行する上での障壁が見えてくるため、最終的な結論はまだまだこれからということになる（注2）。

冒頭にも述べたように、本来保育所、認定こども園、幼稚園の子どもたちに対して格差なく扱わなければならないことを考えると、まず新制度の是正ありきと考えるのが正論ではある。

しかし、新制度がもうすぐ実施される中で、目の前にいる子どもたちに対してより有利な条件で保育を行いたいというのも保育園を運営する者としては当然のことであり、その中で具体的に問題点を提示していくことも、国にさらなる是正を求め一つの方法であると考えている。

（注1）この額の差は学級編成加算として保育教諭1名、チーム保育加配加算として保育教諭2名が加配できるということが大きな要因である。ただ、3名のマンパワーの差は保育の質を考えると大きい。なお、試算によると保育教諭1名あたりの月単価は、1号認定が15名いると40万円強となった。

（注2）例えば、評議員会が必要になるのか、看護師の取り扱いはどうなるのかということ等。なお、評議員会については社会福祉法人制度のあり方協議に併せて、保育所のみ運営にも評議員会の設置を課すことを含め検討中であり、また、認定こども園の看護師の取り扱いについても調整中との国の回答であった。

第 62 回 福岡地方保育事業研修大会

ひかり幼稚園 園長 堤 智行



『夢・希望』

～子どもの笑顔あふれる保育園を目指して～

平成 26 年 8 月 24 日(日)、宗像ユリックス ハーモニーホールにおいて、第 62 回福岡地方保育事業研修大会を開催しました。あいにくの雨天にも関わらず、保育関係者を中心に 600 名を超える方々が集い、会場には空席がないほどの盛況となりました。

オープニングは、第二赤間保育園保育士の木下豊彰先生と、宗像地区保育協会の各園より選ばれた職員たちによる、つながり遊び歌の温かく元気なステージでした。ステージ中央の大画面に、各園の笑顔いっぱいの子どもの写真がスライドで流れる中、歌や遊びを通して客席の参加者も一緒に盛り上がりました。会場全体が、笑顔あふれる大会オープニングになりました。続いて、実践発表では、宗像地区の組織や事業実績の一覧表、取り組みの様子を撮影した写真の紹介を通して、各委員会活動や多様な研修などの取り組みを発表しました。参加者からは感心の声も寄せられ、私たちにとっても、ともに学ぶことの大切さや各園の協力の重要性など、多くのことを再確認出来ました。

式典では、「新制度に向けてのスタートという大きな節目の大会であることを踏まえ、今まで培ってきた保育を見つめ直し、これからの保育所の役割を再認識しつつ、『子どもの笑顔あふれる保育園を目指して』歩んでいかなければならない」、また、「新制度や法人運営の在り方など国の動向を見据え、子どもたちの育ちや保護者への子育て支援に不利益を及ぼすことがないように取り組むことが重要である」など、保育の現状とともに、私たちの今後の進むべき方向が確認されました。

また、会長表彰(一般表彰)が行われ、授与された 34 名の受賞者の方々は、参加者からの温かい拍手に包まれる中、その長年の功績を讃えられました。

記念講演では、教育アドバイザーの下地敏雄先生による講演が行われました。「私の教師人生」の演題のもと、ご自身の教師経験から、「おとな子どもも根本は皆一緒」、「夢と希望をもつことの大切さ」、「幸せをつかむためには努力と我慢と感謝が大事であること」など、力強いメッセージをたくさん頂きました。先生の軽快でユーモアにあふれた語り口で、会場は終始笑いに包まれ、終了予定時刻を過ぎて笑いは尽きず、講演後も「まだ聞きたかった」との声が参加者から多くありました。

子ども・子育て支援新制度の本格実施まで半年を切った今、保育、子育て支援を取り巻く状況は、大きな転換期を迎えています。児童福祉法には、理念及び育成の責任として、「すべての児童はひとしく生活を保障され愛護されなければならない」「国及び地方公共団体は、保護者とともに児童を健やかに育成する責任を負う」と規定されています。今日まで、この理念の実現のため、養護と教育が一体となった保育の充実に努力してきました。今後も、保育の質の維持向上、保育士等の処遇改善と雇用形態の安定など、その保育を守るための努力をこれまで以上に取り組んでいく必要があります。どのような保育制度になっても、子どもたちの「環境」である私たち大人が、笑顔であふれていなければ、子どもたちは元気で笑顔になれません。

最後になりましたが、子どもたちと保護者、そして保育所職員が元気で笑顔になれることを願って、大会報告を締めくくりたいと思います。



第 63 回 筑後地方保育事業研究大会

八女地区保育協会 会長 斗和保育園 園長 中野 七朗



『子どもの力、内なる力』

～保育者の願い、子どもの育ちに夢を託して～

平成 26 年 11 月 3 日(文化の日)、「子どもの力、内なる力」～保育者の願い、子どもの育ちに夢を託して～のテーマのもと、第 63 回筑後地方保育事業研究大会が“茶どころ”八女市民会館「おりなす八女」で、子どもたちの描いたちょうちんで保育関係者の皆様をお迎えし、盛大に開催致しました。日本一を誇る八女提灯の“ちょうちん”“和紙”は八女の伝統工芸が生かされています。各保育園(所)の子どもたちはクレヨンや絵の具等で、伸び伸びとちょうちんに表現しました。子どもたちには地域の祭りや伝統を感じながら成長してほしいという願いを込めて展示しました。

八女地区は、八女市と広川町で構成されており、東西 40 km以上の面積を有する県内 2 番目に広い市郡であり、民間・公立保育園合わせて 23 園の保育園が点在しております。少子高齢社会、過疎社会が顕著に表れている土地柄であります。大会開催の準備に当たり、「保育を取り巻く環境の大きな変革」と、「広範囲に小規模保育園が点在する土地柄での開催」の二つをキーワードに据え、主だった会合でも 20 回以上積み重ねてまいりました。その過程では、様々な課題を捉えることが出来ました。都市部の保育と地方の保育の枠組み条件は大きく異なりますが、子どもの育つ力を信じ、一人ひとりの内なる力を引き出す支援をしていく。そして子どもたちは地域の中で色々な人との関わりや行事などで成長していく…という考え方では同じということです。

さて、本大会は地元からの協力出演による中学生のコーラスと日本民謡のアトラクションで始まりました。大会には福岡県、八女市、広川町の行政関係者、議員をお迎えし、ご来賓の皆様からは、参加者へ心温まる励ましのメッセージをいただきました。本年度は 60 名の保育士の方が福岡県保育協会会長表彰を受けられ、被表彰者を代表して



八幡保育所の川口美奈子先生が代表謝辞を述べられました。

記念講演のテーマは「あいうべ体操で健康な体をつくろう」で、博多未来クリニック院長の今井一彰先生による講演でした。アレルギー性皮膚炎、腸内炎等の病気は口呼吸が原因であり、「あいうべ体操」で口呼吸から鼻呼吸に治そうと講演がありました。会場が一体となって「あ」「い」「う」「べ」をやってみました。参加者は日頃の心がけや取り組みで変化が見られると伺い、すぐにでも実践したいと思われたことでしょう。(ちなみにわが園では、前回今井先生のお話を伺って以来、朝の出席調べの後に「あいうべ体操」30 回が日課になっております。取り組んで 1 年、この冬はその成果が見られるのではないかと考えております。)

最後には、次期開催地みやま市保育協会 荒木法行 会長による方言を交えたユーモラスな挨拶で大会を終了しました。

終わりに、本大会を開催するに当たり、福岡県保育協会役員、筑後地方保育協会大会役員と福岡県、八女市、広川町をはじめ関係者各位のご理解とご協力に心から感謝申し上げます。



いずみ保育園

いずみ保育園 園長 上野 一世

いずみ保育園は、社会福祉法人行橋むつみ会が行橋市立泉保育所を引き継ぎ、平成26年4月より運営している保育園です。



乳幼児期は、一生の中で最も成長の著しい大切な時期です。一人ひとりが主人公になれる、自己表現ができるように育てることが重要であるという思いから、保育方針は「見守る」「褒める」「子どもの自主、自発を促す」とし、一人ひとりの育ちをしっかり援助し、生き生きとした子どもを育てる保育を行っています。

また、生きていく力の土台となる「遊び」も大切にしています。様々なものに興味を持ち、「なんだか面白そう」「やってみたい」と自分のやりたいことが見つけられる環境作りを、遊びの中から引き出すことができたならと日々取り組んでいます。



園庭に菜園を作り、野菜を育て給食やクッキングで食べています。野菜が苦手な子どもも「おいしい!」といつもよりもたくさん食べます。

今年の夏は、サプライズでソーメン流しやスイカ割りをしました。子どもに内緒で準備をする私たちもどんな反応をするのかワクワク。初めての子どもも多く瞳はキラキラ。大人も子どもと一緒に楽しみました。今年のテーマは「子どもも大人もみんな笑顔」、ぴったりの笑顔あふれる夏の思い出になりました。

近くには、小・中・高校、公民館があり、子ども達を見守って下さっています。これから、地域の方々との交流を深め、地域に根ざした保育園になっていきたいと思っています。

新宮下府コスモス保育園

新宮下府コスモス保育園 園長 日野 充子

新宮下府コスモス保育園は、新宮町に社会福祉法人聖会の2つ目の保育園として平成26年4月1日新宮下府に開園致しました。福岡市に3園の姉妹園があり、行事と一緒に取り組み子どもたちの交流、職員間の交流も盛んに行っております。

子どもたちの交流の一つを紹介させていただきます。

毎年、6月に食育の一環として「田植え」を行っております。今年も姉妹園の年長総勢130名で、糸島の田んぼで田植えを行いました。はじめは泥の感触を嫌がり泣き出す子どももいましたが、苗を1つ2つと植えて行くうち感触にもすっかり慣れ最後は全身泥だらけでした。秋にはお米の収穫を行います。収穫後、糸島の運動公園で「おにぎり」を一緒に食べたり、遊んだりします。子どもたちだけでなく職員も楽しみにしている交流の一つです。こんな事が成長した子どもたち同士の繋がりの一つにもなったら嬉しいです。



保育園は子どもたちにとって「居心地の良い癒しの場」でありたいと考えております。縦の人間関係を体験し、たくさんの生活体験が出来るよう一人一人を見守っていききたいと思います。

今年の新宮下府コスモス保育園のテーマは、「芽」下府の地に子どもたちの個性の芽が生まれ、成長と共に大きな花が咲きつづけるように、子どもたちが自分のペースで自分自身能力を高めていけるような環境づくりを目指してまいります。生きる力を養っていききたいと思います。



ひじり保育園

ひじり保育園 園長 鈴木 よう子

社会福祉法人聖ヶ丘会ひじり保育園は、大野城市の牛頸地区に開園いたしました。小高い丘の上に園舎が建っており、緑に恵まれ、夏の強い日差しを周りの木々が子どもたちや私たち保育者をも優しく包み込んでくれているかのように感じます。これから、子どもたちと一緒に春夏秋冬を迎える楽しみをもっているところであります。

私どもの園はキリスト教に基づいた保育を行っており、「強い身体を育む」、「優しい心を育む」、「豊かな知恵を育む」という3つの目標を掲げ、「心の清い志の高い子どもたちを育む」という思いをもって日々保育に励んでおります。また、4月から数カ月が経ちましたが、日々の保育や行事等を経験する毎に、成長する子どもたちと接することができ、喜びも感じているこの頃です。

子どもたちは大人が目につかないところにも大事なものをしまいもっていると思います。子どもたち一人ひとりが大事にしているものを感じ、大切に育み、私たち保育者もしっかりと接し、見つめ、優しく見守る保育をおこなってまいりたいと考えております。皆様どうぞ、宜しくお願い致します。



第48回 全国保育士会研究大会

小郡市 三国が丘保育園 荒金 順子

『子どもが豊かに育つ保育の実現をめざして』

～つなげよう笑顔!輝く未来へのかけはし～

第48回全国保育士会研究大会が10月16、17日の2日間、香川県高松市において開催されました。「子どもが豊かに育つ保育の実現をめざして」～つなげよう笑顔!輝く未来へのかけはし～というテーマのもと、全国から1250名を超える参加者で、会場は熱気が溢れていました。大会のオープニングは、高松市内の園児の「おいで舞かがわ」と題した創作身体表現があり、かわいい歓迎に和やかな雰囲気となりました。

第1日目の開会行事の中で、全国保育士会上村初美会長より永年勤続保育士への感謝状贈呈があり、今年は全国1847名の保育士が感謝状を受けました。

基調報告では、上村会長から保育をめぐる動向と全国保育士会の動きについての報告がありました。幼保連携型認定こども園教育・保育要領の告示を受けて、子どもの最善の利益の保障、0歳児から就学前までの乳幼児の保育には養護とともに教育がある、といったことを盛り込んだ要望書を提出したと話された。新たな施設類型においても、いつも子どもの健やかな育ちが保障されることを願う全

国保育士会の姿勢を感じることができました。

行政説明では、厚生労働省の南新平氏より「子ども・子育て支援新制度」について、幼保連携認定こども園の具体的制度設計や子ども・子育て支援の量的拡充と質の改善等の説明がありました。いよいよ平成27年4月より新制度がスタートしようとするなかで、やはり子どもの最善の利益が第一という思いを強くしました。

記念講演は、香川県出身のヴァイオリニスト川井郁子さんでした。自身の幼少期の体験として、先生から肯定してもらい、先生に会えて自分らしさを追求するきっかけとなり、音楽家への道へつながったと話された。また、マザーハンド基金を立ち上げ、アフリカ、タイの難民キャンプで音楽交流をして、その子どもたちの様子を日本に紹介する活動の話がされる川井さんのまなごしは慈愛に満ちていました。そして何より世界的ヴァイオリニストの川井さんの演奏は、「いつも頑張ってるね」とエールを贈られたような癒されたひと時でした。



研究大会のようす



2日目の分科会は、第二分科会に参加しました。テーマは「子どもの発達と環境(3歳以上児)」で講師は、大妻女子大学家政学部長阿部和子先生でした。

研究1では、遊び込める環境とは一園庭環境を通じてと題して、(1)身近な素材を取り入れた遊び(2)可動遊具を使った遊び(3)固定遊具を使った遊びに注目し、それぞれに事例と検討があった。限られた環境の中でも保育士が設定する環境、子どもへの働きかけによって新たに遊びを創造し園庭がより遊び込める環境になるとの報告でした。講師も「生きていくうえで必要な力を獲得することを支える研究」と評された。

研究2では子どもの主体性を育てる日課の検討と題して、見えて気づき感じる保育をと考え日課の見直しを行った実践事例の報告でした。講師も「意識に上りにくい当たり前と

思われるような日課を見直すことに取り組んだ点は、保育の質の向上に直結するものである」と高く評価されました。

グループ討議では、「子どもの願いや思いを受け止めて展開する保育の環境、時間、働きかけ」について話し合いました。各グループ熱心に話し合いが進み、発表しきれないくらい意見が出されました。

全国から集まった保育士の熱意がひしひしと伝わり、この学びを保育現場で生かしていく仲間の頑張り、勇気づけられた2日間でした。

公立保育所トップセミナーに参加して

吉富町立吉富保育園 園長 佐伯 フジエ

去る8月29日(金)～30日(土)東京ビッグサイトにて平成26年度公立保育所トップセミナーが開催されました。セミナーには全国各地から約400名が参加。行政関係者も多く、2日間にわたり熱心な研修と意見交換が行なわれました。

■1日目【8月29日(金)】

行政説明「子ども・子育て支援新制度等について」

厚生労働省 保育課長 朝川 知昭 氏

基調報告「保育、公立保育所をめぐる動向と全国保育協議会の取り組み」

全国保育協議会 会長 万田 康 氏

講義「保育所における人材育成と人材活用 ～スーパービジョンの視点から考える～」

元梅花女子大学 准教授 植田 寿之 氏

講義「子ども・子育て支援新制度の動向を踏まえ公立保育所の今後を考える」

淑徳大学 教授 柏女 霊峰 氏

■2日目【8月30日(土)】

東日本大震災被災地からの報告「公立保育所が果たした役割とこれから」

石巻市立井内保育所 所長 千葉 幸子 氏 (元門脇保育所所長)

宮城県石巻町立門脇保育所の園長先生で、現在石巻市立井内保育所所長をされている千葉幸子先生から「東日本大震災被災地における公立保育所が果たした役割とこれから」という内容で被災地からの報告がありました。震災直後の緊迫した中での所長として避難場所の選択・決断。そして公務員として避難所運営に携わりながら、避難者の方の支援にあたった保育士さんたちの奮闘の様子や復興へ向けての取り組みが報告され、避難所が被災者の心の交流の場となったことや災害マニュアルも大変参考になる内容で、日々の避難訓練の大切さや人と人とのつながりの大切さを感じることができました。

講義・事例報告とグループディスカッション

「各自治体の保育施設の充実に向けた公立保育所の役割と具体的実践」

講師・コーディネーター 文教大学 教授 櫻井 慶一 氏

【事例報告①】

地域文化を知り、こども文化を発信 ～郷土愛を育む～

高砂市立曾根保育園 園長 久保木 亮子 氏

【事例報告②】

公立幼保連携型認定こども園における取り組み

自分も人も大切にし、共に生きようとする子どもの育成
～幼稚園・保育所の子どもたちが集う楽しいクラスになるために～

阿南市橘こどもセンター 園長 鳥海 裕子 氏

【事例報告③】

親子通園に夢をのせて保育所の魅力を活かした親子への“保育”

北九州市保育課保育所支援担当係長 河崎 幸子 氏

事例報告ではコーディネーターの櫻井先生のコメントの時間がなくなるほど、公立ならではの地域文化や地域に根ざした熱心な取り組みが報告され、公立保育所の役割や地域・行政との連携協働のあり方を考えさせられる内容で、今後、公立保育所の強みを活かした保育施策の必要性を実感することができました。

さばこ cavaco の そねいけ ワーク・ショップ

子どもたちの
想像力に
耳をすまそう

Vol.8

寒さが深まってくるこの時期。冷たく乾燥した空気で喘息や鼻炎などが誘発されてはいませんか? また、咽喉の乾燥はインフルエンザなどのウイルスに感染しやすい状況を作り出してしまいます。もちろん保育園

では喉の乾燥や飛沫感染を防ぐために、お部屋の温度・湿度管理など、こまめに気を遣われていることと思いますが、野外で遊ぶ時の帽子同様、日頃から子どもたちのマスク着用を習慣にできればいいですね。

ただ、インフルエンザ蔓延の時期だけマスク着用を呼びかけても、どうしても顔を覆う違和感や精神的な息苦しさから着用を嫌がる子どもたちも多いのではないのでしょうか。そんな時に、ちょっと愉快な次のようなワークショップはいかがでしょうか。

子どもサイズのガーゼマスクに鼻・口・ほほ・ヒゲなどを描き入れて、変身マスクつくる面白ワークショップです。

まずは、様々な生き物の全体像と、正面から見た鼻と口部分のみを拡大した画像を沢山用意します。鼻と口部分のみの画像を見せて「これ、だあれ?!」とクイズ大会。立派な牙を持つライオンなどはあくびをしているところ、蛇は舌を出しているところなど特徴的な画像を用意するとより分かりやすいのではと思います。園長先生の鼻と口、おひげが特徴の誰かのおじいちゃんの鼻と口、お化粧ばっちりお母さんの鼻と口などの画像を用意しても、とっても盛り上がります。沢山の鼻と口の画像を見て、顔の構成に見慣れてきたら制作に取りかかりましょう。

ガーゼマスクには布用ペンで描き入れていきます。布にはインクがにじみやすいので、注意するように子どもたちに先に伝えておいた方がいいかもしれません。布用ペンは洗濯する前にお家の方に一度アイロンを掛

けてもらおうと色落ちしにくくなります。

沢山のマスクができれば、またまたクイズ大会。お気に入りの1枚を子どもたちに着用してもらって、手のひらで口元のマスクを隠してスタンバイします。一人ずつ前に立ったらみんなで「かーぜひいた かぜひいた だーれかさんが くしゃみした!」と歌います。「くしゃみした!」の瞬間、前に出ている子はマスクに描いた動物になりきって「は、は、はっくしゅーん!」。さて、何の動物に変身したのか当ててみましょう。そうさんだったら大きなくしゃみ、ねずみさんだったら小さなくしゃみ、と愉快なくしゃみが沢山飛び出します。

※ガーゼマスクは洗って清潔を保てば何度も使えて喉の保湿や喘息などの咳エチケットには効果的です。ウイルスの飛沫感染対策には、より目の細かい不織布マスクが効果的です。マスクに慣れたら是非使い分けをお願いいたします。



山下麻里 (やました・まり)

グラフィックデザイナー。九州大学大学院芸術工学府デザインストラテジー専攻修了。2007年より九州大学大学院特任教授目黒実氏が主催する「子どもプロジェクト」に企画・デザイン等で参加する。在学中、ユニバーサルデザイン教育を通じた社会貢献活動プログラム[こどもたちのUD移動ミュージアム]にデザインで参加、同プロジェクトはグッドデザイン賞、キッズデザイン賞を受賞した。2012年、福岡市西区に「生の松原子どもスコール」をオープン。

「保育人材の確保について考える」 (合成の誤謬論から)

先日、県内のある園長から1枚のFAX文書を受け取った。「自分の保育園は、保育協会が行っている『潜在保育士研修事業』にも手を挙げ協力するようにしているが、応募者がいない。また、『保育士就職支援センター』にも求人登録しているが、求職者の紹介が得られない、このままでは保育所運営に支障が生じ、先々不安である。先人たちの努力で築いて来られた保育制度を守っていくのが後に続く自分たちの役割であり、県保育協会として、真剣に保育士確保対策について検討すべきではないか。」という内容であった。

その園長の真っ直ぐな思いと、それに十分に応えきれない私たち事務局の無力さに申し訳なさを感じながら、この一文を記すところである。

人材確保の困難な理由として色々なことがあげられているが、厚生労働省の調査によれば、責任の重さに比し、処遇（給与等の勤務労働条件）が低いとする者が半数近くあり、そのことを一番の理由としている。このことは、日々保育事業を営む会員の先生方にも、実感として理解いただけるのではないかと思う。

しかし、そのような認識を持ちながらも厳しい予算状況を前にすれば、人件費を含め最小限の費用（コスト）で最大限の効果（保育）を得たいとする心理が働くのが常である。事業継続を考えれば、将来に備えた積立（施設整備等）や日々の運転資金の確保を優先せざるを得ず、結果として職員処遇まで及ばない状況となる。このことの延長が今日の人材確保の難しさに繋がっていると考えられる。

経済学の考えの一つに「合成の誤謬」論がある。何かの問題解決に当たり、一人ひとりが正しいとされる行動をとったとしても、全員が同じ行動を実行したことで想定と逆に思わぬ悪い結果を招いてしまう事例を指す。例えば節約し貯蓄を増やすことは個人として正しいが、それを全部が行えば消費不況となり全体としては好ましくない状況となることが好例である。

また、今、国で問題になっている社会福祉法人の内部留保や課税の検討もこの理論の中で理解できる。事業を営む個別法人の利益にかなっても、それが過ぎれば、社会福祉法人全体としては、その公共性の観点からマイナス評価がなされ、制度見直しの論拠を与える結果となっている。このように捉える時、保育においても適度の処遇改善を本気で検討しなければ、全体の利益（人材確保難の解消）に繋がらないと考える。

もちろん潜在保育士研修事業も保育士就職支援センターも大切な事業であるが、それはあくまでも出口対策である。職員が長期間安心して勤めることができる入口の対策として適度な職員処遇が必要であり、そのことで安定的な職員確保が図られるものと思われる。

そのためには、協会として全体の底上げを図るための保育予算の確保要望と併せ、冒頭に書いた一園長の問題提起に繋がる、会員一人ひとりの自助努力に基づいた組織的な取り組みが必要と考えるところである。

福岡県保育士就職支援センター

【編集後記】

この「福岡県保育協会通信」14号が発行される頃には消費税10%の判断もなされていることと思います。消費税が8%になった頃は“アベノミクス”も勢いがあり、このままの勢いで行くかと思われましたがここに来て景気の低迷感や女性閣僚等による政治と金の問題から先行きが怪しくなってきました。

先行きが怪しいと言えば、子ども・子育て支援新制度に限らず、災害の甚大化や国際情勢まで最近は何でもかんでもといった様相です。

これらの中には地球温暖化に象徴されるように人為的なものも少なからず、是非次世代が安心して生活できるという視点から政策が進むことを望んでやみません。

広報部 日野

発行日 平成26年12月15日
発行者 万田 康
編集者 半田 義文
発行元 公益社団法人 福岡県保育協会
発行所 春日市原町3丁目1-7
TEL 092-582-7955
FAX 092-582-7956